

# 選挙と公明党・創価学会

(ジャーナリスト)

松井 覺進

私は中学校がその大森四中でありまして、ここはまあ、ホームグラウンドみたいな、遊び場だったんで非常に懐かしく、何かの縁を感じております。それで、縁に従うというか随縁ということ、心よく引き受けさせて頂きました。今年二月の現代宗教研究所教団論セミナーで、川崎泰資さんが「公明党と創価学会」についてお話になった。彼も大森四中出身ということを知りました。その川崎さんの講演の記事を「赤旗」で読んで、取材をしに来たのが縁でありまして、その時に、私が東京雑学大学というところで講演を頼まれていて、「メディアはどこまで信頼できるか」というテーマですね、その項目の一つに「創価学会タブー」というのを取り上げました。メディアには創価学会がタブーだという、そういうタブーがあります。ここで発行された冊子によると、中濃教篤さんの講演にもそのことが触れてありましたけれども、根強いタブーがあるわけですね。だから普通の読者が、公明党や創価学会、特に創価学会の実態というのはあまり知らない。公明党を動かしているのは創価学会です。それは、ここに「朝日新聞」の一九九七年八月から九月にかけて、竹入義勝元公明党委員長の回顧録という形での記事があります。竹入さんがこう話したというのが出てくるんですけど、その中で竹入さんがはつきりと言ってることです。これをみなさんに回します。

私は農業をしています。今日も五時頃起きて畑に水をやってから出てきたんですけど、信州の富士見高原という所

で畑やつてまして、自然相手にやつてますと、人間社会の矛盾といいますか、そういうのを強く感じる場合があります。特に創価学会・公明党というのは矛盾だらけで、それをきちんと整理して、明らかにしていくことは非常に大事なことじゃないか。私は、個人主義と全体主義というのを一つのテーマに持っています、その関係で、二見伸明という元衆議院議員に、今まで二回インタビューしてるんですね。この二見さんは、今も創価学会員なんですけど、所属政党は公明党、新進党、自由党、民主党と変わり、今民主党員です。そういうことで、「なぜ創価学会員が民主党なのか」という疑問があったわけですね。奥さんも創価学会員だけど、夫と共に、夫唱婦随でやっていると。元々彼は、両親が創価学会員で、埼玉県なんですけども、自然に創価学会員になって、公明党議員になったわけですね。だけど新進党の時に公明党が合体して、そこで小沢一郎についた。そういう経歴で、個人の自立ということを人生観としてるんです。これは、創価学会と全然相容れないわけですね。従って、そういう個人主義者は、自然と離れていく。政党としては民主党にいった。で、ご多分に漏れず選挙妨害に遭いまして、創価学会青年部に取り囲まれたり、裏切り者と罵倒されたりしたということです。ですからこういうことから、創価学会と公明党というのは一体であるというふうに見て間違いない。

彼は、「創価学会・公明党は政教一致で、全体主義だ」と明確に述べております。全体主義と個人主義という問題はあとでまた触れます。それで、二見さんが言うにはですね、創価学会というのは一応仏教なんですけど、例えば就職試験なんかで、信仰は仏教と書くでしょう。そうすると、面接で、貴方の宗派は、と問われた場合、創価学会員は答えられない、という状況が出てくるわけですね。日蓮正宗から破門されておりますから。そうすると、これは一種の新興宗教で、形としてはオウム真理教とかそういうのと同じような状況になってくるんじゃないかというふうに私は思うんです。全体主義というのは、個人より組織集団が優先で、独裁者が専制支配することが多いですね。で、独裁に疑問を持ったり、独裁者より業績を上げたりすると罵詈雑言を浴びせられ、干される。創価学会の場合は池田大

作が独裁者で、専制支配してるわけですね。竹入さんのように、日中復交の手柄話を新聞にしゃべって、大々的に報道され、池田大作の役割が全然出てこない、そういうようになると、竹入さんは蛇だとか罵詈雑言を浴びせられて干されてしまった、ということになるわけです。日中交渉のことは別にして、竹入義勝元公明党委員長の回顧録から、公明党と創価学会の関係について発言してることを抜き出してみました。「公明党の人事権は創価学会にある、選挙にしても人事にしても党はみな、創価学会に従属していた」「公明新聞や雑誌『公明』も創価学会の意向が大きなウエートを占め、部数は創価学会の意向で決められてしまう」「創価学会の世界には独特の論理がある。辞めるか辞めないかは自分で決めることではない。任免は、（任命したり辞めろということは）池田大作会長（今は名誉会長ですけど当時会長）の意思であり、勝手に辞めるのは、不遜の極みだというものだ」「公明党・創価学会の関係は、環状線で互いに結ばれているのではなく、一方的に発射される放射線関係でしかなかった」。つまり中心があつて、池田大作という中心があつてそこから一方的に発射される放射線関係、そういうことですね。ここに創価学会と公明党の関係というのはきちんと出てくると思います。よく創価学会のことを「学会員」とか「学会」とかそういうふうに言いますけど、他のまともな学会が迷惑するんで、私は創価学会とフルネームで呼ぶようにしております。

二番目に、庇を借りて母屋を乗っ取るという狙いが創価学会にある、と私は思います。一九七〇年の一月にですね、言論出版妨害問題というのが起こりまして、その六九年の十二月から実際にはあつたんですけど、一般の新聞に出てきたのは、一月になってからです。その時私は「朝日新聞」の整理部というところで、新聞の編集をしていました。それで朝刊の二面を扱っていた時に、デスクの中瀬信治という人が恐る恐る原稿を持ってきたんですね。それが言論出版関係の原稿で、それをどのくらいの大ききで扱うか、というのでちよつと悩みました。デスクももちろん悩んでるわけです。それで、それなりに扱って。中瀬さんという人は、東京大学の丸山真男さんのゼミの出身なんです。政治部に行つて、整理部に来てデスクをしたという人で、あとで公明党の狙いというか、そういうのを聞いた

ら、彼は、即座に「庇を借りて母屋を乗っ取る」と言ったわけです。で、王仏冥合とか国立戒壇というのは私は今でも、内部で持つてると思います。当時はもつとはつきりと言つてたわけです。ですから、政治的に、庇を借りてですね母屋を乗っ取るというのは当たつてるんだと思います。ところが今日は、かなりの比重が池田大作家名誉会長を守るという風が変わつてきて、その手段として政権党にすり寄つて、政権党を左右する、ということが大きな比重を占めてくるようになったと私は見えています。

レジュメに年表みたいのが付いておりますけど、一九六七年一月二十九日の下に、点々点々というのを入れておいてください。ここは省略して、いきなり一九九九年、最近のことに移つてますので。読んで頂けると分かるんですけど、一九五五年四月二十三日、第三回統一地方選挙で政治に進出と。この年は、いわゆる五五年体制と言われているように、社会党が左右合体し、さらに保守が合同し自民党ができて、いわゆる五五年体制ができたわけです。それで、竹入さんのその回顧録の副題に、五五年体制のはざままで、と書いてありますけど、まさにその五五年に創価学会の政治進出があつて、そのはざま、つまり、あつちについたりこちについたり、あるいはキャスティングボードを握つたり、そういう現実の動きをするようになった。それから一九五九年六月二日の第五回参議院選挙から国政に進出、六人が全員当選。それからだんだんだん拡大してきました、公明会から公明党の結成に至ります。第七回参議院選挙で公明党が十一人当選。それから一九六七年一月二十九日には衆議院に初進出、公明党二十五人が当選、という状況になつて、この頃は、中道主義とか人間社会主義とか、あとになると看板が全然違つてくるんですけど、そういう風なことを言つてた時代で、人間社会主義なんて全然よく分からないですよ、中身が。ただ言葉だけが走つていて。公明党のやることはくるくるくるくる変わるんで、まともに受け取れないという、そういう状況があると思います。

それで、一九九九年十月に自自公連立。自由民主党と自由党と公明党の連立です。これから一貫して政権与党に、



つまり池田大作を守るといふ方向に、ずっと今日まで続いて、選挙を、いわゆる自民党議員の当落を左右する、そういうふうになつてきたわけです。今回の参議院選挙（二〇〇四年七月十一日）で、比例区の得票を見ればいいんですけども、八六二万票を獲得してるわけです。前回は八一八万票。今回は改選数十人に対して十一人が当選している。プラス一という状況なんです。去年の衆議院議員選挙で八七三万票、比例区で。それよりも少し落ちてるようですけども。池田大作の号令で一千万票、一千万票と言つてたわけですけど、一千万票は取れないし、取れなかったし。そうかと言つて一千万票取るような現実の選挙戦術を採つてなかったんじゃないかと私は思うんです。だから、その点が非常な矛盾です。創価学会・公明党つて矛盾だらけなんですけれど。なぜかと言いますと、比例区で見ると六位までが数十万票、浜四津敏子さんなんかは百万票以上取つた。それで七位八位になると万票単位です。がくと落ちて七位、八位、二人当選しております。しかも二人とも公明党の職員という、肩書きはたいしたことない、そういう人達です。そういうのは、要するにブロックを六つに分けて、六つのブロックでそれぞれ名前を記載して、こう書けと教育するわけです。浜四津さんなら浜四津さんと書けと、それでその通りで何十万票と取つたんですけど、そういうことをやつてなかった七位八位は政党票で当選してくるわけです。公明つて書いたら、その公明票が多かったから当選した。そうすると、一千万票取るには少なくとも十以上のブロックに分けて、十人以上割り当ててしゃにむにやらなきや取れないと思うんですけども、そういうことはしてない。六位、六人しか確実に、ブロックで、確実に当選させるということをやつてないんです。ですからそこところが非常に矛盾していて、一千万票てのはただのかけ声だけだったのかな、ということ。その真意はよくわかりません。評論家によつては作戦の失敗というけど、そんな作戦の失敗することは最初から分かつていたんです。

今回の参議院選挙の政策上の特徴は、小泉首相はブッシュ政権のイエスマンです。日本の総理は代々、大体アメリカ政権のイエスマンなんですけど。あとで、ちよつと時間があつたら触れますけれども、私は発端のことをかなり調

べていまして、つまり、なぜ日本外交はアメリカのイエスマンかという点です。で、自衛隊のイラク派遣とか自衛隊の多国籍軍参加にイエスと言ったわけです。ところが元々、イラク戦争というのはアンフェア・ウォーだと思うんです。不公正な戦争。前回の湾岸戦争は、イラクがクウェートに侵攻したという大義名分がありました。今回はなぜアンフェア・ウォーかという点、大義名分が希薄であるうえに、ヘビー級とモスキート級がボクシングするような、最初っから勝敗ははつきりしてたわけです。従ってアンフェア・ウォーと私は言っていたのです。現実にブッシュは、二〇〇一年の九・一一の、ワールド・トレード・センターの破壊以前からイラクに戦争を仕掛ける計画があったというし、大量破壊兵器は出てこないということで、ますますアンフェア・ウォーということになっている。

公明党との関係でいえば、公明党は、アンフェア・ウォーにずっと賛成してきたわけです。それは川崎さんが二月に話したことで、内容もそういうことに触れてるわけですけど、なぜそうなのかというと、坂口厚生労働大臣、これは公明党出身なんですけど、年金改正を、しゃにむに通させたかった。それで、自民党よ、年金法改正を通させてくれ、その代わり、イラクに自衛隊派遣することにも賛成するから。そういう取引で、国民の意思は二の次というのがどうも実態だったようです。そのところに、やはり無理があつて、創価学会もやっぱり平和な党だ、平和な組織だ、平和主義の組織だと、そういう人達はいるわけですから。私のいる信州の富士見高原なんかにも創価学会員がいまして、ある集会で池田大作批判をやったら、ただちに「私は創価学会員だけでもと、池田先生は……」って言い始めたんです。彼女は津田塾大学を出ていて一応インテリなんですけど、変なことを言ってます。つまりイラクの戦争に賛成したのは、あれは公明党がやったことだというんです。そこで、内部的にどうかわかりませんが、どうもイラク戦争はマイナスだと思って、切り離しの動きがあるのかも知れませんが、創価学会の内部で。あれは公明党がやったことだと、いうふうに彼女は言っていました。それで、創価学会は矛盾だらけだっという一つの例は、参議院で小池晃共産党政務委員長が、偶然私テレビ見ていたんですけど、坂口力厚生労働大臣が五年前に、年金について言ったこと

と、今言っていることとか、法律でやろうとしていることは全然違うじゃないかというんで、そういう質問をしたら、坂口厚生労働大臣は、今時五年も経てば状況は様変わりになる。その問答の中で三年でも変わるのが当然、というよきな雰囲気の間答だったんです。そうすると、年金法改正の制度も、三年もたてば状況が変わるから、制度も変えなきゃいけない。ところが百年安心プランということで公明党は宣伝してまして、選挙中もそういう宣伝を、神崎武法代表なんかやっております。非常に矛盾してますよね。共産党のちよつと弱いところは、その時立て続けに、じゃあ今の年金法改正も、三年とか五年もたないんじゃないかと、それで状況変わるんじゃないかというふうに、二の矢を継がなかったんです。そこでそれを追求すれば、メディアも取り上げるかも知れないし、非常に状況が変わってきた可能性があると思います。ところが、共産党のそういうアドリブ的な発想というのが希薄だった気がします。

今回の参議院選挙の特徴の一つは、最初、公明党が自民党を応援するのは、適当に応援するというような姿勢だったようです。つまり、自民党だけで五十何人とか当選しちゃうと、公明党はいららない、もういらないうことになりかねない。そうすると、政権与党としてキャスティングボード握れなくなるわけですね。だから適当に、大負けしては困るけど、そんなに取りすぎても困ると、そういうところの姿勢があつたんですが、どうも自民党の状況が悪い。それで六月二十二日に八選挙区で自民候補の支持を追加したわけですね。それで、その支持者、支持追加のうち七選挙区で、支持候補が当選してます。だから、この「朝日新聞」の記事は、土壇場になって重点十地区では三勝七敗って比較を出していますけど、その前にそういう追加支持ということもあつたわけですから、これだけ取り上げても、現実がちよつと違うんじゃないかという気がするんです。それで、追加の八選挙区のうち、愛知で浅野勝人という衆議院からの鞍替えした人ですけど、衆議院で落選して参議院に移ってきた。その人が一位で当選して、あと二人民主党で。要するに、公明党に追加で支持してもらって一位になった。川崎さんと同じNHK政治部出身ですが、N

HK政治部でも違うなという、人物の比較の問題としてレジュメに名前を出しておきました。選挙の終盤に入つて、七月六日に十選挙区で支援強化、ということになって、こちらは三勝七敗。こちらは「朝日新聞」の企画記事で「自民の命綱、公明党逃げた」というふうに詳しく出てるわけですけど、全般的に見ると、やはり公明党の自民党支持というのは効いてるんじゃないかと私は思います。政治評論家は何か言うか知らないんですが、例えば福島県では、一位が民主党で二位が自民党で、その自民党の岩城光英さんというのが、四十万票取ってるわけです。ところが、郵政族として有名な荒井広幸さんというのは、福島県の田舎の特定郵便局長の息子でありまして、この人も衆議院から鞍替えしたんですけど、そういうマイナス面もあったと思いますが、十七万票しか全国で取ってないわけです。福島が地盤なのに、一方では、自民党議員が四十万票取ってるのに何で荒井さんは十七万票なのか。比例区で十七万票。ちよつと疑問に思うんですが、地元の人の中には三十万、岩城さんが四十万票なら荒井さんは三十万票取ってもいいんじゃないか、という人もいるわけです。ところが実際は十七万票。要するに、何かわからないけど岩城候補に、選挙区で、公明党は立ってないわけです。だから創価学会の票が岩城さんに相当数いつてる、ということは想像できるわけです。比例区の場合は、公明党が立ってますから、大半の創価学会票が公明党にいつてるということの一つの事例になるんじゃないかというふうに私は思います。

それで、政治っていうのは何かという問題なんですけど、政治学者でこういう政治の捉え方してる人はあんまりないんで、私は非常に不満なんですけど、政治っていうのは税金の集め方、使い方を決めることが政治ではないかと思うんです。財政学という学問があるんだけど、その財政学っていうのは批判的に税金の問題を取り上げることが少ないんです。そうじゃない人もいますけれど、少ない。政治と関連させて、税金を取り上げるといふこともあまりないんです。そこが問題だと思うんです。公明党がやった、皆さんご存知の地域振興券、商品券とも言われてる。それにだいたい七千億円くらい使ってます。それから、最近では児童手当の拡充、拡大です。小学校三年まで拡大してい



る。それを非常に熱心にやるわけです。つまり、そういう商品券、地域振興券を貰う人達とか、児童手当をもらう人達に創価学会員が多いということです。一方で、財務と称して巨額の資金を徴収しています。鈴木棟一っていう「毎日新聞」出身で、今政治評論やって、「夕刊ゲンダイ」とか「週刊ダイヤモンド」に書いてます。彼に言わせると、創価学会のその職にあつた人から取材したっていうんですけど、年間財務で八千億円集めるって言うんです。そうすると、だいたい所帯数が三百万所帯として、平均二十数万円。それで、一人当たり二十数万円出すということになる。そのことを、先程の創価学会員、津田塾出身の創価学会員に言ったら、「いや私はそんなに出してない。それは三千万円出す人もいるから」というような話なんです。でも八千億円というのは否定しませんでしたから、たぶん本当だろうと。それで彼は、週刊ダイヤモンドにも、長銀が潰れる時に、あの長銀は金融債っての出してまして、あれはそういうお金を隠すのに非常に便利な債券なんです。割引金融債。それで、その八千億円を、その金融債、長銀のあれで持つてるって書いたし、講演でも話してるんですけど、創価学会から一度も何も言っただけでこなかったという話です。そういうわけで私は財務と称して一方で吸い上げて、税金を使って還元してるっていう、そういう仕組みになってるんじゃないかと。児童手当とか地域振興券のことです。今度の参院選挙で、キャスティングボートは一層強まりました。自民がちよつと落ちて公明がプラス一ですから。そうすると、そういう政策的なものを、税金を使った政策的なものを出してくるかどうか。一つ興味のあることだと思います。そういうことに対して、目を光らせた方がいいんじゃないか。メディアは弱いですから、国民一人一人が目を光らせていったほうがいいというふうに思います。で、二見さんに言わせると、あまりいい表現ではないんだけど、人間というものを五段階評価で評価すると、公明党支持層、つまり創価学会員つてのは一か二だ、というふうに言っていました。創価学会の中に少数のエリートがいることは確かです。非常に危ないのは例えば、外務省の優秀な課長がですね、衆議院議員になったり、神崎さん自身東京地検の検事でありましたし、そういうことが方々であるわけです。エリートを手なずけて登用していく、とそ

ういうことが方々にある。一方で、あとに述べますけど、情報を平気で漏らすわけです。官庁情報も漏れてるんじゃないかと思うんです。そういうこと平気ですから。加藤千幸という、最近時々付き合ってる外務省出身の、辞めた時はスイス大使ですけど、その前シリア大使やったり、元々はドイツ畑の人なんですけど。彼も外務省の優秀な課長が創価学会員で、衆議院議員になったということに非常に危機感をもっていました。

今の情報の問題ですけど、これは有名な事件ですが、言論と出版の自由妨害事件、藤原弘達さんの『創価学会を斬る』、内藤国夫さんの『公明党の素顔』と、これ代表的なものを挙げましたけれど、その他にもいろんな圧力のあった事件があります。この言論と出版の自由ということに関して、創価学会のためにはこんなメディアはなくてもいいんだというのがかなりあるみたいです。大田区でも区会議員が議会で、区の図書館から「文春」と「週刊新潮」を閉め出せっていう質問をしております。そういう質問すること自体が、非常に恥ずかしいといいますが、民主主義をよくわかっていないといえますか、そういう自覚もなく平気でやるわけです。それから、巨大広告、これはまあ、川崎さんも話したんで簡単に言います。池田大作の本の出版、「聖教新聞」の印刷の委託などで報道機関は買収されている。買収とは、金銭だけでなく、精神の買収も含む。それで、ほんとのことを書かなくなるといえることが大きいんです。イタリアとかフランスに詳しい、NHKの国際放送をやった人がいます。イタリアで柔道を教えまして、前田義徳さんに引き立てられて、NHKの国際放送に入ってきた石井勇さんという人がいるんですけど、イタリアのメディアは、いろんな自分の都合のいいこと書いて欲しいって、品物とか金とかよく貰うんだそうです。だけど、彼等は貰うけれども、貰うものは貰って、書くものは書きちゃうという、そういう逞しさがあるわけなんです。日本の場合は、書くべきことを書かない、そこが問題だというふうに思います。それで面白いのは、あとで言いますが、創価学会は全体主義だと言いましたけど、そういう認識がメディア及び学者、評論家のたぐいに、非常に希薄なために、『潮』という雑誌に、平気で登場してることです。この現象は非常に興味あることで、新聞広告や電車のつり革

広告にそういう人の名前が出てますけれども、創価学会に対して距離を置いて潔癖な人もいるので、そのことは念頭において、そういう人との比較の問題として、眺めるのも面白い。ほんとの意味で全体主義を分かっている言論人というのは、私は信用できないと思っております。一つの例が、勝共連合系の『知識』という雑誌があった。これ潰れたんですけど、勝共連合っていろいろな名前でもって、名前をかえて擬態という形をとった。実態は勝共連合なんですけど、『知識』に、今の『潮』文化人みたいのがですね、いろいろ執筆したりしてたのです。ところが、勝共連合ってのは靈感商法とか、そういう、私の知り合いも、五十万円の壺を買わされたっていう、何の役にも立たない靈感商法などで、一般の人に迷惑、詐欺みたいなことをやってたわけですけど、そういうことが分かってきた一方で、『パソコン追跡勝共連合』っていう本が出たわけです。パソコン追跡って、パソコンに、勝共連合系の雑誌とかなんか、あるいは講演したりなんかした文化人の名前を入力して、どこで何をやったか、そのリストを青木慧という人が本にしました。そういうことと相俟って、たぶん、その雑誌は潰れてったんだと思います。そういう前例があるということですから、パソコン追跡創価学会ということもそのうち出てくるかも知れません。

創価学会は、個人のプライバシーなんてのは全然、眼中に無きが如く、宮本顕治共産委員長宅の電話に盗聴器を仕掛けました。その池田の側近中の側近の山崎正友という弁護士が主体で、のちに彼は創価学会を辞めて、盗聴を曝露したわけです、その実態を。学生部には竹岡誠治っていうのがいたんですけど、彼はその後、出世をしたんですけど、最近になって、ヤフーBBの四六〇万人分の顧客情報流出に関わったことが明らかになってます。右翼団体幹部の森洋が入手したものを、ヤフーBBの代理店エスエスティー社長の竹岡に提供し、その意を体してソフトバンクに対して、合弁会社に数十億円出資をしろと恐喝したと。これは未遂に終わりましたが、そういうことで、情報流出ということが、非常に怖いことの一つなんです。

それからさつき言い忘れましたが、今度の参議院選挙の特徴の一つは、投票した無党派層の半分くらいは民主党

に入れてるっていうんです。前は小泉ブームで、小泉さんに流れたという傾向があつたんですけど、今回は無党派層の投票の半分は民主党にいった。民主党が一応勝つたということになって、図式としては無党派層対創価学会。創価学会は自民主党を応援してるんで、そういう図式になって、今回に限ってはそうなっております。それで、問題は、投票率で、五六%ちよつとなんですけど、選挙区の投票率が、その投票率が、数%上がるだけで、状況が一変すると思ふんです。五六%がもし一〇%上がれば、状況が一変するというふうに思うし、そんなに上がらなくても、かなり変わる。つまり、公明党票つてのはがっちり一〇〇%以上、つまりフレンド票という、お付き合いのある近所の人とか、学校のお友達とかそのへんに電話をかけたつて、それで勧誘して、病人は当日車で投票所に連れてくると、いろんなことやるわけです。そのために、今回は、期日前投票七十七万票もあつて、全投票数の一二%くらいになった。期日前投票のかなりの部分が創価学会ですから。それで、期日前投票やって、他のあまり意識の高くない、そういう人を勧誘するのに全精力を注ぐわけです。選挙投票日当日はそういう狩り出しをやっている。そういうことのために期日前投票をやる、そういうのが実態ですから。それに対して今度の場合は、無党派層が自民党ノーというので動いたという、或いは創価学会ノーということで動いたということだと思います。私の希望ですけど、宗教界、仏教とかキリスト教、神道も含めて、創価学会をよく研究して、これは日本のためにならないと思つたら、無党派層でいいんだけど、公明党が支持した候補者には投票しないと、自民党の中でも、何人かは、公明党の支持を取つてない。非常に少ないけれども、そういう人もいるわけです。だから公明党が支持する候補には投票しないと、という雰囲気とか空気というか、暗黙の合意というか。それができれば、自民党自体も変わってくるんじゃないかと思ひます。で、全体主義に鈍感なマスメディア、とききほ言いましたけど、全体主義つてのはどんなものかと言ひますと、具体的にはナチズム、スターリンのテロル政治、昔はスターリン体制とか言つてたんですけど、最近はどう、テロルとどういうふうにはほとんど合意ができてると思ひます。天皇制軍国主義、これは戦前の日本ですね。滅私奉公の会社主義、



カルト教団など。特徴としては組織中心、組織や独裁的権力者の考え方で言動が左右される。組織に従属していたほうが楽だから。組織の意を体して他を非難したり、他に危害を加えたりする。排他性と差別主義という特徴があります。自分が何のために生まれ、生きているのか自覚しない。自覚した時は組織からの離脱現象が起こる。

私は今はほとんど信州なんですけど、小平市に住んでいた時、小平市玉川上水を守る会つてのをやって、今年で三十年になるんです。その会員の一人なんですけど、これが去年に会報で、ガリ版で作ってるんだけど、小平市の議会議員に「玉川上水の保護、どう自然に帰すか」つていうアンケート調査をした。共産党を含めて、みんな一人一人が回答してるんですけど、公明党の議員六人だけは、集団で回答してます。こういうの、平気で。個人個人が独立してないんで、集団で行動する全体主義の一つの特徴じゃないかと思えます。それと気がつかないで、平気でこういうことをしてる。

個人主義は、どういうものかというのと、例えば安藤昌益の『自然（しぜん）真営道』、自然（じねん）真営道ともいう人いますけど、二宮尊徳の「唯我独尊」論、夏目漱石『私の個人主義』云々といういろいろあるんですけど、安藤昌益は、「自然」というのを、「自り然ル」つて読ませております。ひとりすル、というんですね。それから、「唯我独尊」論つてのは釈迦の、「天上天下唯我独尊」という言葉からきたんですけど、二宮尊徳は、その、天上天下唯我独尊から、「一人ひとりが唯我独尊である」「猫も杓子も唯我独尊」というような、典型的な個人主義論を展開してます。それから夏目漱石の『私の個人主義』は、これは大正年間に学習院で講演した内容なんですけど、学習院つていのは権力、金力の持つてる家の出の人が多いわけです。それに対して、夏目漱石は自分も、自分の自己の尊厳も大事だけど他人の自己の尊厳も認める、その両方なければ個人主義ではない、あなた達のような、権力も金力もある人の出自の人は、往々にして、そういう他人に自己の価値観を押しつける。そういうような意味のことを言っております。個人主義の特徴は個人の自由、個々の人間の自由と自立が中心で、最終的には自分の判断で、自分の責任で働

く、話す、書く。それを面白いと思うか、難しいと思うかが分かれ道で、面白いと思えば個人主義というのはいくわけです。自分が何のために生き、生まれ、生きているか自覚している。ただ、戦争中にもあったように、組織による生命や生活への圧力によって転向する人間の一般的弱さはある、と私は思います。メディアの役割は、個々人のために、人間の自由と自立に役立つ報道をすること、そのための判断材料を提供し、個々の自立した人間の人權を擁護し、自由、自立に沿った提案をするのが第一の存在価値。こういうところは当然、創価学会のような、独裁的である組織に対してそれなりの批判をしなければいけない、と思います。

問題提起として書いたのは、個人主義という点から、宗教は一般的にどうなのかなと。キリスト教の場合は、キリストはですね、別に国家とか集団の罪を背負って十字架にかかったわけではなくて個々人の原罪を背負って十字架にかかったということで、元々は、個人主義であると思うし、仏教の場合も、個人の救済ということが基本ではないか、そういう意味では個人主義がそこにある。組織とか国家のため、ではないのではないか、というのを問題提起として最後に書いたわけです。ちょうど一時間ぐらいになりましたので、あとは質問をどうぞ。

どうもありがとうございました。